「ぼくはおっさんといっしょに我利馬号を創ることによって、人間として生きることができた。また、そうして生まれてきた我利馬号と共に航海することで、いっそう人間になることができた。」

出典：『我利馬の船出』　灰谷健次郎著　新潮文庫
選・洋戸蘭光

ヨットの我利馬号に乗って航海中、強い雨風に遭遇し、怪我、食料の損失、そういったあらゆる困難の中、最後の手段として自分を支柱に括り付け、迫りくる波を耐えようとしたときの、主人公我利馬の思いである。ただ生きるだけなら、誰だってできる。しかし、それは動物となんら変わらない、人間でなくても出来ることである。人間として生きることの困難な境遇に生まれながら、人間として生きることが出来た、そんな我利場の言葉に、私たちは人間だろうかと思わず自らに問いかけそうになる。